認可日　1995年8月10日　第三種郵便物許可　（毎週1回水曜日発行）
2022年1月7日発行　増刊通巻第8384号　SSKS ストロークグループニュース

ストロークグループニュース　50号特集号／2022JAN

CONTENTS

●NPO法人ストローク会　1P
◇理事会及び総会を開催
◇第一生命の第73回保健文化賞の受賞
●ニュース50号おめでとう！特集　2～5P
◇一般財団法人小峰研究所・理事長
番町小峰クリニック・院長　小峯 和茂
◇東京家政大学名誉教授・（福）豊芯会顧問
上野 容子
◇ストローク会前理事長　堂本 暁子
◇社会福祉法人結の会
オフィス クローバー施設長　松田 暁子
◇前西南学院大学教授　舘 暁夫
◇NPO法人ストローク会理事　小張 和俊
◇結の会理事
新宿区立障害者福祉センター前館長　矢沢 正春
◇ストローク会理事長　村木 太郎
●年表　上段6～7P
●多くの方々に支えられて　下段6～7P
NPO法人ストローク会副理事長　金子 鮎子
●働いているパートナー　8～11P
◇只隈光人さん／浅沼博さん／長倉祐太さん／
崎山英雄さん
●社会福祉法人 結の会　12P
●ストロークグループ紹介　12P

ＮＰＯ法人ストローク会

◆理事会及び総会を開催

NPO法人ストローク会は去る令和3年3月30日に令和2年度第2回理事会を、5月24日に令和3年度通常総会を開催しました。いずれも新型コロナ感染症の感染拡大の影響を受け、オンラインでの開催となりました。

理事会においては、令和3年度の事業計画並びに活動予算案が審議されました。就労継続支援A型事業所「ストローク・サービス」の運営を中核事業とし、従来行ってきた清掃事業、（公財）ヤマト福祉財団向けDVDの制作、つどいの開催といった事業を行っていく予定です。とりわけA型事業所においては、令和3年度より報酬改定が行われ新たに「スコア方式」による報酬算定が導入され、これまでの利用者の労働時間数のみに頼っていた報酬構造から、支援の質も評価の対象になってくるため、職員ひとりひとりのスキルアップ、事業所全体としての支援力向上、事業所の体制整備や職場環境の整備が今後の課題として上げられました。法人全体の事業費としては8,400万円規模となります。

5月の総会では、令和2年度の活動報告と決算報告が行われました。今般のコロナ禍においても清掃の売上げはほぼ前年並みを維持（前年比-1.8%）し、パートナー（利用者）の支援についても通常通り実施できたことが報告されました。パートナーの皆さんも大きく影響を受けることなく順調に推移できたことから、訓練等給付費の収益も前年比-2.8%と微減でとどまることができました。とはいえ、支援力向上を目指して人員を増強した結果、A型事業所における人件費が前年比145.2%となってしまいました。令和3年度からのスコア方式に則り支援力を向上させることや新たにパートナーを迎え入れることで給付費の水準を上げ、収支のバランスを取っていくことが課題となります。

オンラインによる開催ということで、従来の対面式による総会ではなかなかお会いする機会のない社員の方とも意見交換ができる貴重な場となりました。

◆第一生命の第73回保健文化賞の受賞

この賞は国民の保健衛生向上のため1950年設立され、生活習慣病対策や高齢者・障がい者福祉などの課題に取り組む団体・個人に与えられるもの。今回は9団体・個人5名のうちの1人として、当会副理事長の金子鮎子が12月20日に受賞しました。

受賞理由は、「長期に働くことが困難とされている精神障がい者を長年にわたり働く人として育成・雇用し、そのノウハウを発信して、雇用施策を促し、障がい者の働く権利の拡大を通して、就業による共生社会の実現に貢献している」というものです。

推薦は長年精神障がい者の就業の応援者で当会理事の、前西南学院大学教授の舘暁夫先生です。

認可日　1995年8月10日　第三種郵便物許可　（毎週1回水曜日発行）
2022年1月7日発行　増刊通巻第8384号　SSKS ストロークグループニュース

ストロークグループニュース　祝50号おめでとう！特集

一般財団法人小峰研究所・理事長
番町小峰クリニック・院長

小峯和茂

ストローク・ニュース50号おめでとうございます

私がはじめて金子さんとお会いしたのは、昭和47年5月で、精神障害者家族会（東京つくし会）の年次総会の時でした。日本カウンセリングセンターの関口先生（元理事長）とご一緒でした。日本カウンセリングセンターの創始者・友田不二男先生が紹介されたロジャースの「非指示的療法」は、私が精神科医になりたての時に、先輩から教えられて、感銘を受けたものでした。その後、関口先生の御自宅の「日本橋教室」で始まった『家族教室』（月1回）に参加したのが楽しい思い出です。その頃の金子さんは、NHKのエリート・サラリーウーマンであったのですがその雰囲気は全くなく、またカウンセラーを目指そうとする人とも違って、淡々として毎回必ず出席されていました。そして『日曜サロン』と名づけられた精神障がい者グループ活動は、現在まで続いています。

私は一介の精神科医として傍で見ていただけですが、浜田晋先生（当時は都立精神衛生センター医師で、家族教室に参加され、後に下町に先進的な精神科診療所を開かれた）が、ご自身で設けられた日本病院・地域精神医学会の「浜田賞」を贈られたのが、平成18年でした。金子さんは多くの方々から認められて、数々の賞を受けられました。

仲間の方々も、元気に御活躍されているので、これからのニュースが発行されるのを楽しみにしています。

東京家政大学名誉教授
（福）豊芯会顧問

上野容子

株式会社ストローク／NPO法人ストローク会創設時の思い出

金子鮎子さんに誘われ、アメリカの精神保健福祉活動を視察に行く機会がありました。それは、彼女がNHKを退職し精神障がい者の就労支援に力を注ぐ契機となり、（株）ストロークの創設に至りました。当時、わが国初めての精神障がいを雇用する株式会社として画期的なことでした。代表取締役：金子さんのお誘いで社外取締役として小林紀子さんと私が参画することになりました。また、金子さんがNHK勤務時代に親交があったNHKのOBの方々が次々に応援者として参画してこられ、彼女のお人柄と仕事に対する真摯な態度を知る機会となりました。

主要な業務は清掃でしたが、物販販売、障がい者雇用の啓発研修などにも取り組んできました。
私の最も思い出深い仕事は、新宿駅ホームの行き先表示看板の取り換え作業でした。一夜で全て完了させねばならず、徹夜に近い作業でしたが、当会社職員の精神障がいがある当事者さん達と共に取り組み、100万円の売り上げを獲得し、創設時の貴重な資金源となりました。（株）ストロークは、その後、NPO法人ストローク会も増設し、私が勤務していた豊芯会とコラボし「あなたとTalking」の名称で、当事者の方々と共に企画し、精神保健福祉分野の関係者を招いた研修会を実施してきました。その後、ストロークも豊芯会も事業が増え、当研修は継続できないまま現在に至っており、残念なことです。

創業以来現在まで、事業形体は変化していますが、ストローク関係者が、精神障がい者の雇用・就労支援に重点をおいた理念と活動を継続していくことを願い、微力ながらご一緒していきたいと思っています。

認可日　1995年8月10日　第三種郵便物許可　（毎週1回水曜日発行）
2022年1月7日発行　増刊通巻第8384号　SSKS ストロークグループニュース

ストロークグループニュース　祝50号おめでとう！特集

ストローク・金子鮎子さんとの60年

ストローク会
前理事長

堂本暁子

私がはじめて金子鮎子さんにお会いしたのは、1964年の東京オリンピックの時です。今から60年近く前になります。

金子さんはNHK最初の女性カメラマン。当時は他のテレビ局に女性カメラマンはいませんでしたから、女子村などの取材は金子さんの独壇場。あわてた各テレビ局は、急遽、女性カメラマンを養成しました。私もその内の一人でした。まだフイルムの時代でベル＆ハウエルのカメラを使っていました。私は撮影の仕事が面白くてたまらず、競技場や練習の場など、何処へでも飛んで行く神出鬼没な記者兼カメラマンでした。そこで出合うのが金子さんでした。

それから半世紀、金子さんはこつこつと精神障がいを抱える人たちの自立を促し、就労をサポートし、一方、私は取材をしていた不登校の子供たちが精神病院に入れられたことから精神障がい者問題に取り組み、二人は再び出会うことになりました。私は精神障がい者が入院ではなく、可能な限り地域で暮らせるよう国に提言したのですが、金子さんの活動は、まさにその実践でした。

百人一首に「瀬をはやみ　岩にせかるる　滝川の　われても末に　あわんとぞ思う」という句があります。本来は、恋人同士の再会をうたっているのでしょうが、金子さんと私もこの句みたいな再会でした。

金子さんが1989年に（株）ストロークとストローク会を立ち上げ、私は会の理事長に。また御一緒に働けることは嬉しい限りでしたが、あまり貢献できず、今でも申し訳なく思っています。会社の仕事はビルの清掃。午前4時起きで、私は一度だけ参加したのですが、金子さんの信念の強さ、持続的な実行力に頭が下がりました。

コロナ禍でメンタルヘルスが注目されていますが、金子さんはまさに時代を先取りされたのだと言えます。ストローク会はその後NPOの法人格も取得し、精神障がい者の就労・雇用の実践だけでなく、多角的に活動を展開している金子さんの長い間のご努力が実ってのことで、今後が期待されます。

協力し合い発展を！

社会福祉法人
結の会
オフィス クローバー
施設長

松田暁子

ストロークグループニュースNO.50の発行、おめでとうございます。

当施設は「クラブハウス・ストローク」という名称で平成7年に開設されました。株式会社ストロークで働く精神障がい当事者の皆様が、午前中に終わった清掃現場から通い、午後の時間を仲間とゆっくり過ごす集いの場でした。平成13年に「オフィスクローバー」と名称を変更しましたが、現在も高齢者施設の清掃をNPO法人ストローク会「ストローク・サービス」の皆様とともに担っています。業務にあたっては、「ストローク・サービス」の職員に『清掃の三大要素』について講義をいただいたり、実際の清掃現場で研修させていただいたりしました。株式会社、NPO法人、社会福祉法人と、種別の違う法人が一つのグループとなり連携することで、それぞれの得意分野で受けた仕事や活動を共有しグループ全体の活動の幅が広がっていくことが期待されています。

今から27年ほど前、「精神保健職親会」（以下、職親会）で株式会社ストロークの社長でいらした金子鮎子さんに出会いました。まだ精神障がい者が雇用率にカウントされていなかった時代に、金子さんを始め精神障がい者を受け入れ育てている事業主の皆様の熱い思いに触れることが出来たのは貴重な経験でした。職親会が加盟する「東京都精神保健福祉民間団体協議会（略称：都精民協）」では、精神保健福祉業界の先頭に立って、先駆的な活動をしている先輩方と知り合うことが出来ました。これらの経験は私の財産となり、障がい者支援をする上での基礎になっていると感じます。

当時の金子さんの事務所兼ご自宅で、年数回「業務連絡会」をしていました。報告事項などが終わるといつも打ち上げとなり、フランク・ロイド・ライトのお弟子さんが設計したというおしゃれな家の柱の陰や床に積まれた書類の下から現れた、ズブロッカや焼酎とともに楽しく交流を深めました。これからも協力し合い、楽しみながら一緒に発展して行けたら嬉しいです。

認可日　1995年8月10日　第三種郵便物許可　（毎週1回水曜日発行）
2022年1月7日発行　増刊通巻第8384号　SSKS ストロークグループニュース

ストロークグループニュース　祝50号おめでとう！特集

前西南学院
大学教授

舘 暁夫

「支援があれば働ける」について

これまで30年以上の間、精神に障がいにある人たちの就労や雇用について考えたり、調査したり、その促進のために仲間と運動してきた。特に社会に対する運動には理念や方法を端的に示すmottoが必要だ。そこで私が考えたのが「支援があれば働ける」だった。

40年前、精神疾患を持つ人が働こうと思って、職安で病気を告知すれば、「治してから来なさい」といわれ、黙って就職すれば、病気を隠したために非常に苦労するという、どうにもならない状況にあった。そのような時代でも、適切な支援が与えられれば、彼らも労働者として有力な戦力足りうるということを実証していたのがいわゆる職親さんたちだった。私は各地の職親さんたちを訪ね、その成功の鍵は「生活と職業の一体的かつ継続的支援」にあるのではないかと考えるようになった。要は、共に働き、共に生きることで生まれる支援のパッケージである。この職親体験が以後の運動の基本的なコンセプトとなった。

時代の進展とともに、雇用・就労の「支援」には様々なものが加わった。例えば、専門家による支援、職リハや雇用率制度などの行政サービス、医療や企業人における偏見や差別感の希薄化など多領域にわたる。ただ、精神障がいに限れば雇用・就労における「支援」のポイントは職親さん的なものにこそある。

支援について今一つ加えると、私は多くの事例から、働く力を次の公式で示せるように思う。

働く力　＝　本人が持つ力　×　周りの支援力

かつて講演でこの公式を説明したことがある。すると、父親と思しき高齢の男性いわく「作業を手伝ったところでなんになるの」と。あくまで主役は本人さん。「働く力」を極大化するために手を尽くして本人を育成するのである。つまり、加算ではなく、乗算なのである。

多くの働く精神障がいを持つ人たちを観察すると、何らかの「支援があって働いている」ことがわかる。逆に、「働けていない」という状況は必要かつ適切な「支援がない」ことを表す。そして、必要かつ適切な「支援」が何かを問うことこそが雇用・就労支援のスタートなのである。「支援があれば働ける」のmottoはかなり正しい。

NPO法人
ストローク会
理事

小張和俊

伴奏者と共に起ちあがった障がい者

ストローク会がNPO法人になった平成13年、初の自主製作ビデオは沖縄のふれあいセンターの「納得のいく社会参加」でした。当時は障がい者の実態をビデオに収める事が可能かどうか不安な時期でした。報道取材の現場に携わって来た者にとって、当事者を正面から映すことは避けるのが当時の常識でした。しかし、障がい者がごく自然にカメラに向かって自ら語り出した事は衝撃的な驚きでした。

「働くことで、病気の事を忘れるようになった」「給料は低いが働く力をつける場所だ」「家族からの自立を目指したい」「自分達が出ていかなければ、世間の人は判らない」。テーマは「地域とのつながりを求めて」です。この活動を支えた人は、沖縄県を退職し、障がい者の自立を強く推し進めた永山盛秀さん。

施設の管理・運営も当事者に任せ、自己責任の力を育て、自分はあくまでも、アドバイス役の伴走者に。夜のミーティングでは、仕事の進め方や悩み、将来の計画等活発な発言や時には閉鎖病棟での苦しみも出て、理解し合う場となりました。

注目されたのは、メール便の配達です。ふれあいセンターが初めて団体として、ヤマト運輸と受託契約を結び、今日の障がい者によるメール便の先駆けとなりました。また、休日にはグランドゴルフを開催、その一切の裏方をふれあいセンターで引き受け、町おこしに寄与しました。

ヤマト福祉財団小倉昌男賞の「一万円からの脱出」の運動はそのフォーラム等で障がい者や支える人達の活動が視覚化され、ビデオ（当会制作）で上映されて、セミナー参加者の理解を深める一助になりました。

先のパラリンピックでも障がい者が感動的な活躍をされ、人間には多様な可能性が秘められていて、相手の個性をよく理解し、信頼する伴走者の働きの大切さをアッピールする場になりました。

認可日　1995年8月10日　第三種郵便物許可　（毎週1回水曜日発行）
2022年1月7日発行　増刊通巻第8384号　SSKS ストロークグループニュース

ストロークグループニュース　祝50号おめでとう！特集

私の心の背後霊

結の会理事
新宿区立障害者
福祉センター
前館長

矢沢正春

「ストローク」の歴史と言えば、金子さんとの歴史になるかと思います。電話や手紙、訪問によって今日までつながってきました。見込まれる程の力はないのに熱心に誘われその執念？に根負けして結の会の理事になり、気づいたらもう30年です。私も社会人前半は会社勤めで福祉の世界は中途参入だったので、最初にお会いした印象は「このオバサン、何となく気が合いそう。福祉の世界で足りないと感じている何かを持っている」というものでした。

当時、私は障害者就労福祉センター（区の外郭団体）の事務局長に就任したばかりで、就職支援と福祉作業所等の受注作業の開拓に奔走していました。身体障害者雇用促進法が障害者雇用促進法になった頃ですが、精神障がい者は制度の対象外でジョブコーチや施設外就労という言葉もない時代で、オフィス・クローバーは共同作業所でなく「クラブハウス」ということで紹介されました。私は、外郭団体の現場責任者に採用された民間人第1号でしたが、それを後押ししたのが障害者団体連絡協議会（障団連）だったこともあり、（株）ストロークの障団連加盟の取次ぎをしました。当時の幹部役員から言われたのは「営利企業のストロークが非営利の福祉連合会に加盟するなどありえない」という返事でした。無理かなと思いつつその後、直接対面の機会を設けると加盟が認められました。金子さんの熱意と粘り勝ちでした。

私は、区立施設で障がい者が働くこと、そこで就労支援者の人材育成がしたいと思いリサイクル活動センターの運営を請け負いました。この施設の清掃をストロークにお願いして、その後、その実績を元に区立あゆみの家の清掃や街頭の看板や防災広場の清掃、消火器点検も受注して多くの現場で精神障がい者の皆さんの力を借りましたが、受注開拓で私の心には背後霊のように金子さんの存在がありました。

ストローク会とA型事業

ストローク会
理事長

村木太郎

ストローク会は、就労継続支援A型事業を行っています。A型では障がいのある人たちは、利用者として福祉サービスを受けながら、雇用労働者として働きます。労働者ですから、労働基準法や最低賃金などの労働法制が適用されます。もともと創設時の（株）ストロークは、障がいのある人もない人も一緒に働く会社でしたから、障がい者が労働者として働くA型の仕組はストローク会にとって自然でした。

A型事業は、企業就労が困難な障がい者に対し、福祉サービスと就労の場の両方を提供する「二兎を追う」仕組みで、バランスが難しい事業です。福祉サービスに重点を置きすぎると、支援費頼りの運営となり事業管理、作業規律がおろそかである、製品が低品質で市場では通用していない、事業に発展性がなく社会の変化についていけていない、障がい者の仕事を通じた成長がみられない、などの問題が生じます。逆に事業経営に重点を置きすぎると、障がい者本位が忘れられ、短時間就労・単純作業・支援者の過度の介入等により事業のコストを過度に切り詰めるたり、企業就労ができる障がい者を抱え込んでしまいます。最近では、支援費で利益をあげることが中心になり本来の趣旨を見失った「悪しきA型」なるものまで出現しています。

このため制度の変革が始まっています。措置費の計算方法がスコア方式になり、従来の労働時間に加えて、事業継続性、働き方、支援力、地域連携などを多面的に評価するようになりました。また、全Aネット（NPO法人就労継続支援A型事業所全国協議会）では、スコア方式をさらに発展させて独自の基準を加えた「優良A型認定」の制度を作り、良いA型の基準と事例を全国に拡げる取組をしています。

ストローク会は創設の頃から、職員は「支援」に加え一緒になって清掃事業に従事する、障がい者は「利用者＝お客さん」ではなく、ともに働くパートナーである、という考え方で、この難しいバランスを取ってきました。宅配ボックスの清掃や防滑事業など新しい事業にも少しずつ取組み始めています。しかし、スコア方式や優良A型認定の評価基準に照らし合わせてみると、そこそこ上位の水準ですが、まだまだ向上の余地がたくさん残されています。これから職員とパートナーのみなさんが力を合わせて、もっと高い水準のA型事業を目指していってほしい、それを全力で支援するのが理事長としての務めである、と考えています。

認可日　1995年8月10日　第三種郵便物許可　（毎週1回水曜日発行）
2022年1月7日発行　増刊通巻第8384号　SSKS ストロークグループニュース

グループニュースの主な内容

平成	元年 1989	NO. 1	（株）ストローク設立（3/6）、ストローク会発足（4/20）、毎日新聞記事により、渋谷の清掃現場も。問い合わせ多数
	2年 1990	NO. 2	JICAのダイレクト・メールの宛名書き・封入・発送代行始まる
	3年 1991	NO. 4	ファウンテンハウスの当事者を講師に映画と講演の会「みのりの家」と共催、第1回あなたとTALKING
	4年 1992	NO. 6	ILO159号条約批准への期待、社内報創刊、加賀市（社福）幸徳園の漆器の販売開始
	5年 1993	NO. 7	世界精神保健連盟1993年世界会議（8月）のシンボルマーク提案、市民交流で、あったかハートのTシャツとバッジ頒布
	6年 1994	NO. 8	多岐にわたる会社と会の活動紹介　あなたとT⑥「働くこと、そして生きることの意味を考える」
	7年 1995		
	8年 1996	NO. 9	クラブハウス・ストローク開設（1995.6/8）、（株）ストローク近くのオカビルへ（1995.8/1）、SSTのプログラムも開始
	9年 1997		
	10年 1998	NO.10	日曜サロン・家族の集い、スタートして26年目に
	11年 1999	NO.11	ミニ交流会　リサイクルのミニ交流会～早稲田の安井潤一郎さんを囲んで
	12年 2000	NO.16	金子社長「第1回ヤマト福祉財団賞」の一人として受賞内定
	13年 2001	NO.18	NPO法人ストローク会設立、№19設立シンポジウム開催（10/1）、あなたT⑫、⑬「働くということ」
	14年 2002	NO.20	沖縄のふれあいセンターの活動紹介「納得のいく社会参加」ビデオ完成・頒布へ
	15年 2003	NO.26	全国精神保健社会適応訓練事業研修会東京大会開催（8/23・24）
	16年 2004	NO.28	ヤマト福祉財団から研修用ビデオ「仕事を創る」を受注
	17年 2005	NO.29	あなたとT⑯ 精神障害者にも“雇用率”適用「雇用率ってなぁに？」当会当事者からも報告
	18年 2006	NO.32	（株）ストロークの3取締役浜田賞受賞
	19年 2007	NO.33	在職者の職場復帰実践研修等開催（9/14・15）
	20年 2008	NO.34	「納得のいく社会参加～家族からの自立を求めて　パートⅡ」製作開始
	21年 2009	NO.35	働く人のメンタルヘルス事業を新宿区との協働事業制度として開始
	22年 2010	NO.36	沖縄のビデオをヒントに高田馬場でも“つどい”始まる
	23年 2011	NO.37	ストローク・グループの再編を討議～（株）ストローク定時株主総会～
	24年 2012	NO.38	ストローク・サービス開所／NO.39西早稲田リサイクル活動センター所長インタビュー
	25年 2013	NO.40	障害福祉サービス第三者評価受審
	26年 2014	NO.41	ストローク・サービス利用者インタビュー
	27年 2015	NO.42	ストローク・サービス業務連絡会でグループワーク／NO.43 「利用者」から「パートナー」へ
	28年 2016	NO.44	ヤマト福祉財団DVD取材レポート／№45ストロークサービス近況報告、金子副理事長、全Aネット理事の一人に
	29年 2017	NO.46	障がい者就職面接会レポート
	30年 2018	NO.47	村木新理事長就任
令和	元年 2019	NO.48	生きづらさをかかえた少女たち～若草プロジェクト～
	2年 2020	NO.49	コロナ禍でのストローク・サービスの現場の状況について
	3年 2021		

多くの方がたに支えられて

NPO法人ストローク会　副理事長
金子鮎子

1989年3月に株式会社ストロークを、その応援団体のストローク会を4月にスタートさせて、今年で33年になり、日曜サロンなど精神に障がいのある人のとの関りは、50年になります。当時は、精神的な病気や障がいのある人は職安でも、「病気を治してから来なさい」と断られ、病気を隠さないと就職できない状況でした。

でも実は、働きたい人たちは隠して働いていました。

当時は夜間診療が少なかったので、昼間働いていると受診できず薬が無く、再発してしまう人が多かったのです。

私たちは病気があっても、隠さず共に支え合って働く場として、作業所でなく、ちゃんと稼げる株式会社の形にしました。

当初は清掃だけでなく、出来る仕事は何でも、DMの宛名書きや発送代行だけでなく、共働きのお宅の夕食作りも担当しました。

清掃については、心配してくださった厚生省の技官だった精神科医の方がビルメン会社の方を紹介して下さり、その社からビルメン協会の正しい清掃の指導を受け、更には清掃現場も分けて頂きました。

或る精神科病院の事務長になっていたNHK時代の上司の紹介で、一つの病棟の清掃を担当することにもなりました。朝食前から食堂に集まってくる多くの患者さんを見て私は、精神の患者さん＝“朝起きられない病”ではないことを実感しました。

働くためには、生活のリズムを整える事が第一であることを確信、当社で働く人たちには清掃の技術を身に着けながら、働くための生活習慣を徐々に整えるよう工夫し、提案しました。

働く回数も週1から週3へと少しずつ増やし、続けることで自信を付け、また家族からも信頼されるという好循環が生まれます。

認可日　1995年8月10日　第三種郵便物許可　（毎週1回水曜日発行）
2022年1月7日発行　増刊通巻第8384号　SSKS ストロークグループニュース

株式会社ストローク及びストローク会の動き	世の中の主な動き
7月開始の日本橋のビルの初仕事、9月で切られるが、10月新宿の3ビルと精神科病院の清掃受注	新元号「平成」がスタート
個人宅の夕食準備の仕事、ダイレクト・メール封入・発送代行受注	東西ドイツが統一
都の社会適応訓練事業の訓練生の受け入れ5人以上に	湾岸戦争、ソビエト連邦崩壊
友の会N　東京障害者職業センターから、2名就労、障がい者雇用関係で研修会講師の受注多数	ボスニア紛争、LA黒人暴動が発生
カルシューム飲料の販売を開始	サッカー・Jリーグが開幕
国や都へ精神障がい者の職リハや雇用に関し実績をもとに提言	ネルソンマンデラ大統領に就任
バブル崩壊で清掃の現場が縮小、働く人が43→26人に減少	阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件
4月からクラブハウス・ストローク（後の結の会）事業開始	羽生善治が将棋タイトル7冠独占
三鷹の病院、世田谷のビルの清掃契約解除	香港がイギリスから中国に返還
精神障がい者の職業生活継続関係の調査受託（高障機構から）	長野オリンピック・パラリンピック開催
精神障がい者の職業生活継続関係の調査継続（高障機構から）	東海村CO臨界事故
M市障がい者センターの定期清掃を精神保健関係施設と共同受注	世界で「ミレニアム」を祝う
清掃の新しい現場としてヤマト運輸（株）杉並営業所の作業開始	アメリカ同時多発テロ事件
第1回精神障害者就業支援中央セミナーに協力、金子社長「働く広場」編集委員に（～2012年4月）	日韓ワールドカップ開催
精神障害者就労支援セミナーで当社当事者報告、あなたとT⑭「働くということ」その⑤	六本木ヒルズ開業
平成14年度から協力機関型ジョブコーチ事業受託受託（対象は知的障害者・事業所内の支援）	営団地下鉄民営化「東京メトロ」へ
あなたとT⑰「企業は求める！“働く意欲のある人”を」	JR福知山線脱線事故が発生
「偏見をなくしてほしい」全国精神障害者社会適応訓練事業研修会・宮城に当会からも参加	郵政民営化「日本郵便株式会社」発足
NPO法人、富士ソフト企画株式会社と協働して障害者委託訓練事業を実施	新潟県中越沖地震
「障害のある労働者の職業サイクルに関する調査」（平成19年度～35年度）の委員に金子社長	日本でiPhone発売、リーマンショック
NPO法人、区の協働事業提案による「働く人のメンタルヘルス事業」を区民・中小企業対象に開始	民主党に政権交代、オバマ大統領就任
精神障害者社会適応訓練事業（職親）の各自治体実施状況調査（～2017）	日本年金機構発足
ストローク会新理事に菊地裕子氏等就任、A型事業所名は「ストローク・サービス」に	東日本大震災
就労継続支援A型事業所として「ストローク・サービス」新宿区西落合に開所	東京スカイツリー開業
あなたとT㉔「ちょっとでも楽しい未来を～あなたの楽しいライフプランを作ってみよう～」	東京オリンピック／パラリンピック開催決定
あなたとT㉕「恋愛も仕事も!!」	消費税が8%に引上げ
あなたとT㉖「明るく、楽しい節約術!!」	マイナンバー制度運用開始
障害福祉サービス第三者評価受審（第2回）、あなたとT㉗「健康や健康レシピ!!～もやしとの出会い～」	小池百合子都知事誕生
	トランプ大統領就任
村木太郎氏　理事長に就任	豊洲市場開場
障害福祉サービス第三者評価受審（第3回）	新元号が「令和」に決定、消費税10%に
	新型コロナウイルス蔓延
金子副理事長第73回保健文化賞受賞	東京オリンピック／パラリンピック開催

里親をもじった職業の親＝「職親」の全国精神保健職親会も1988年には発足していました。私共もその職親会の活動（社会適応訓練事業）に参加し、その事業の支援を得て、東京都や保健所と連携しながら、ご本人達には訓練手当が支給されるこの事業を活用し、訓練からそして雇用への道筋を作りました。（平成4年から東京都と全国の精神保健職親会の事務局長に）

かつて参議院議員でいらした堂本さんは（当時、ストローク会理事長）厚生省の精神保健課長を誘って新宿ダイカンプラザの早朝の現場を視察、障がいがあっても元気に働いている姿を実地にみて頂いたこともありました。

1993年、世界精神保健連盟の大会（WFMH）が日本で開かれる事になり、そのロゴのデザインについて精神科医達から相談され、当会で提案・制作しました。私共も大会に参加し、バッジやTシャツも販売、これがご縁で、何か所かの診療所の清掃を今も担当しています。

当時、東京都の職親会の事務局長をしていた私は都の精神保健福祉センターと労働省系統の障害者職業センターが直接連携の無いことに困り、就労に関する研修会を一緒に開くことを提案・実施し、相互の交流に漕ぎ着けました。

1992年、WHOの159号条約を日本も批准することになり、障がいの種別による差別はしてはならないという事から日本でも、精神障がい者も働く環境が整備されるようになって来ました。そして、厚生省の中に「精神障害者の雇用の促進に関する研究会」が発足し、私も会社の実践から委員の一人に招かれ、「精神障害者の雇用に関するメッセージ発信事業」の実施に全国の職親会の方々と数年にわたり尽力しました。

合わせて、独立行政法人高齢・障害・求職者支援機構発行の「働く広場」の編集委員にもなり、14年間にわたって全国各地の精神障がい者達が企業等で働く姿を紹介しました。

長らく応援頂いている舘暁夫先生の推薦で、2000年には第1回ヤマト福祉財団小倉昌男賞を受賞、翌年度から、都内数か所のヤマト運輸（株）の営業所の清掃のお仕事もこの20年間頂いております。

このように多くの方々に支えられて、当会も50号のニュースまでの歩みをたどる事が出来たことを深く感謝いたしております。

働いているパートナーの紹介

グループニュースの50号記念企画として、(株)ストロークの時代から今日に至るまでストロークで働いてきた方たちから、村木理事長と金子副理事長が昔のことや今の状況についてお話を聞きました。

お話を聞いたみなさん

◆**只隈　光人**さん(65)　非常勤職員
勤続年数:27年目
勤務している現場:新宿ダイカンプラザ、クレインハウス(新宿)、ヤマト運輸百人町ビル　ほか
就労時間:平均6時間／日

◆**浅沼　博**さん(62)パートナー
勤続年数:30年
勤務している現場:戸山ハイツ集会場、細工町高齢者在宅サービスセンター、宅配便ロッカー、目白教会(定期清掃)
就労時間:週3日　7.5時間／週

◆**長倉　祐太**さん(40)パートナー
勤続年数:12年
勤務している現場:西早稲田リサイクル活動センター、新宿リサイクル活動センター、俳協ビル(下落合)、大泉金杉クリニック(大泉学園)
就労時間:週5日、20時間／週

◆**﨑山　英雄**さん(52)　パートナー
勤続年数:14年
勤務している現場:
日常清掃:ヤマト運輸杉並和泉ビル(永福町)、こころのクリニック石神井(石神井公園)、メンタルケア協議会(代々木)、南麻布リージェンシー(麻布十番)、高田馬場創業支援センター
定期清掃:新宿リサイクル活動センター、西早稲田リサイクル活動センター、南麻布リージェンシー
就労時間:週5日、25時間／週

質問①ストロークに入ったきっかけは？

只隈:トラックの運転手とかいろいろやっていたのですが、入退院を繰り返していて、仕事があまり長続きしていませんでした。病気という自覚を持てなくて、薬を飲むとだるくなるのでちゃんと飲まずにいて、悪くなって入院して仕事をやめ、退院して仕事に就く、というのを5, 6回繰り返していました。

ストロークには入院先のケースワーカーから紹介していただきました。最初は研修を受けて、1日3時間週3日という軽い仕事から始め、週4日、5日と次第に増やしてもらいました。

浅沼:退院して働こうと思っていたら障害者職業センターで紹介されました。

長倉:中部精神保健福祉センターの人に薦められました。最初はアルバイトの方が稼げると思ったのであまり気が進まなかったんです。でもアルバイトの面接がうまくいかなくて、こっちでいいかと考えてストローク会にしました。

﨑山:作業所に通っていたのですが、社会との接点を持ちたくて仕事を探していました。ハローワークで(株)ストロークの求人をみつけて、作業所の所長に相談したら、精神障がい者に理解があるところだからチャレンジしてみたら、と勧められて決めました。

質問②実際に仕事をしてみてどう思いましたか？

只隈:仕事は楽でした。最初は1人の現場を2人で分け合って、こういう感じなら続けられるなと思いました。清掃の仕事にも抵抗はとくにありませんでしたが、嘔吐物の処理などではいやな思いもしました。

ストロークに入った頃はまだ病気だという自覚に乏しくて、薬を飲み忘れふらふらになって、金子さんに迷惑をかけたこともありましたが、今は夜眠れるし朝すっきり起きられます。薬が合っているのと飲み忘れもありません。仕事に慣れてきて生活のリズムが整ってきたからかもしれません。

浅沼:正直言って、ゴミと格闘するのはいやだなと思いました。

仕事がきついとは思わなかったのですが、薬の副作用で眠くなるのがきつかったです。途中で帰ったりして社長(金子さん)にもずいぶん迷惑をかけました。
落ち着くようになったのは40半ばを過ぎてからです。
最近は、前に比べるとだいぶ良くなったと思います。体力もつき、遅刻・欠勤もほとんどありません。危険な酸性洗剤も使えるようになりました。もっと仕事を覚えたいという欲も出てきました。

職場も(A型事業所になって人員配置に余裕ができ)困ったときにフォローしてくれるようになりました。みんな一所懸命に仕事をするようになってきたと思います。

長倉:現場に入ってみて支援者が厳しかったですが、

なんとかなるだろうと思いました。

初めの頃はちょっと面倒でしたが、職員さんがすごくきれいに掃除するので、やっていくうちに気持ちが変わってきて、自分もきれいにしたいと思うようになりました。

今は、職員さんともいろいろ話しをして、それが息抜きにもなって仕事が楽しいです。昔はあまり話す方ではなかったのですが、ストローク会に入って変わりました。

﨑山：作業所のときよりも精神的にきつかったです。初めの頃は試されているような気がして、被害妄想が出て行けなくなることもありました。なかなか仕事量も増やせませんでした。

辞めようと思ったこともあるんですが、職員さんに通うだけでいいから、と言われて辞めずに続けられました。

質問③仕事を続けることができたのはどうしてですか？

只隈：まずまわりのスタッフに助けられてきました。いい人が多く、あまりきついことも言われませんでした。仕事も自分の性格に合っていた気がします。最初の頃は清掃が程度の低い仕事ではないかという気持ちがありましたが、必要な仕事で大切な仕事だなという気持ちが強くなって、やりがいがあります。毎日仕事が終わって帰るときには、ああ今日も一日働いて良かったなと思う瞬間があって、充実感があります。

また、定期清掃に携わるようになってからは資格が欲しくなって、10年目くらいにビルクリーニング技能士の資格を取りました。仕事の後に東京美装で週に2～3回、3ヶ月くらい研修を受けさせてもらうことが合格につながったと思います。緊張を乗り越えて難関を突破できたことで、自分自身に対する自信もつきましたし、時給も少し上がりました。

浅沼：職員さんが仕事は厳しかったけれど、ずいぶん失敗をかばってくれて、これじゃいけないなと思ったのが大きかったです。

病状が安定して薬が減ったことも大きいと思います。前はこんなにハキハキしゃべらなかったですね。

責任感が強くなったこと、両親が亡くなって自立した生活をして、しっかりしてきたこともあると思います。前よりも食事もきちんと取るようになりました。

長倉：職員さんがみんな優しいです。注意されることもありますが、基本的に優しいからやりやすいです。

掃除の仕方を教えてもらえるので、自分でやれるようになったし、言われたこと以外もやれるようになってきました。例えば、リサイクルの仕事で缶やペットボトルをつぶして小さくするのは自分で始めました。自分の判断で玄関のガラス拭きをやめたら、後で注意されたといった失敗もあります。

朝ちゃんと起きて夜ちゃんと寝るということもできて、病状が安定していることもあります。生活のリズムが大事です。年末年始の休みは生活が乱れるので気をつけています。

﨑山：職員さんのフォローがあったからです。それまでは対人関係でずいぶん悩んでいたのですが、職員さんに「3S講座」というのを1回1時間で10回くらいやってもらって、悩まなくなりました。

3Sは、しなやかに、したたかに、しぶとくだったと思います。とてもわかりやすく話してくれました。例えば、それまでは10人にあいさつしたら10人から返事が来ないと、嫌われているんじゃないか、変な目で見られているんじゃないかと悩んでいたのですが、きっと家でいやなことがあったんだとかコンビニの店員を思い出してください、店員があいさつしてもいちいち返事しないでしょうと言われ、そうかと思いました。悩みすぎずに悪い考えを絶つ、ひきずらないということを教わりました。

その結果、神経が図太くなって、あまり物事に動じなくなりました。それまでだったらこれは嫌がらせなのかなと思っていたことも、一瞬思っただけですぐ断ち切れるようになって、ずいぶん楽になりました。それまでは次から次へと問題が起きると思っていたのが、今は問題が起きないです。

そのほかには、仕事をいきなり増やすのではなく、ちょっとずつ増やしていって、ダメだったら減らしてもらって、という繰り返しが続いて、今は落ち着いているという状況です。職員さんから「ダメだったらすぐ言ってくださいね」と言われて気分的にもすごく楽でした。5年くらい前から安定して一人暮らしも始めました。

質問④ストロークで働いてきて、印象深いエピソードは？

只隈：最近、人の仕事ぶりをみてアドバイスをする仕事になっているんですが、あまりそう言うのには向いていないなと思っています。教えるのが苦手で見ているだけっていうのはできない性格なんです。研修から補助に変わって足りないところを手伝うことになって、少し気が楽になりました。

浅沼：社長に怒られたことが印象に残っています。あれが無かったら、今ここにいたかどうかわからないです。

長倉：2年前に身近な人が亡くなったときにショックですごく辛くなったのですが、事務所で職員さんがずっとついていてくれて、夜も電話で話を聞いてくれました。親身になってくれたのがありがたかったです。それがあって今やっていけるのかなと思います。

あと、このあいだ久しぶりに失敗してしまい、スタンドミラーを割った時も、職員さんが怒らずにけがの心配をして、いやな顔一つせずに事務室に説明してくれました。後で一人で謝りに行くのは勇気が要りました。

﨑山：3年くらい前に職員さんといざこざがあって、一瞬カッとなって途中で帰ってきてしまったことがあります。それで辞めようと思ったんですが、別の職員さんが夜に電話で話を聞いてくれて、それで何とか持ち直して続けることができました。今思うと辞めなくて良かったです。

質問⑤今、気になっていること・困っていることは何かありますか？

只隈：一番困っているのは体調です。大腸の調子が悪いのが続いています。

浅沼：困っていることは特にないです。コロナも別に影響がなく仕事ができています。

長倉：施設に入っている祖父、姉にコロナで会えないのがつらいです。姉とは4月が最後です。祖父とは1年以上会っていなくて、毎週電話しているのですが、声だけじゃなくて会いたいです。

他はあまり困っていることはなくて、ひょうひょうとやっている感じです。

今は一人暮らしで食事も作っています。走りが趣味で体が資本なので、食べるものはちゃんとしなきゃと思っています。

﨑山：コロナの初期の頃ですが、現場のスタッフから「手すりは私たちが消毒するので拭かなくていいです」と言われました。それって、自分たちはウィルスを拡げてしまっているんじゃないか、逆に迷惑をかけているんじゃないかと悩みました。

私生活では、今は都営住宅に一人暮らしをしています。自分で思ったように過ごせるのが、居心地がいいです。週3回お弁当を取る以外は食事も自炊しています。前に中華料理の見習いをやっていたので、火を扱うのは怖くないです。

質問⑥趣味や余暇について教えてください。

只隈：音楽が好きで、「笑う三日月船」というバンドで主にベース、パーカッションとコーラスを少しやっています。CDも2年くらい前に2枚目が完成しました。

個人的にも曲を作っていて、もう4,50曲あります。家でピアノを弾いて歌っていると、ストレス解消というか、リラックスできるんです。バンド仲間が誘ってくれて映画を見に行ったりもします。

浅沼：パソコン教室で習ってから、家に帰ったらほとんどパソコンをいじっています。Wordを使って家計簿、メニューも組んでいます。

長倉：ランニングが生きがいで、1週間で100キロくらい走っています。今日は朝に17キロ走って夜も7キロ走るつもりです。ストローク会に入りたての頃は、夕方から夜にかけて体調が悪くなることもあって夜はあまり走れなかったのですが、少しずつ走れるようになりました。無理しないことと仕事がリズムになっているのが良いのだと思います。

以前は5キロのロードレースに出ていたのですが、今はコロナなので出ていません。モチベーション維持のため記録は計っています。今年の目標は18分50秒です。

﨑山：ラーメンの食べ歩きが趣味の一つで、職員さんから教えてもらって行っています。最近では高田馬場の旨辛ラーメン表裏という、大ぶりの鶏の唐揚げが載ったラーメンが一押しです。馬場はラーメン激戦区で、普通に美味しいくらいでは生き残っていけないのですが、私はそこがいいと思います。

あとはゲームが趣味で、プレイステーションで格闘ゲームやロールプレイングゲームをやっています。ファイナルファンタジー10がまだ途中なんですが、一番好きです。でも、夜中までやって朝起きられなくて遅刻したということは最近はありません。休みの前の日に夜更かしすることはありますが。

質問⑦今後のことについて聞かせてください。

只隈：バンド活動が停止しているのですが、まだやりたいことがあるので、続けられたらいいなと思っています。バンド内で不和があるので、難しいかもしれませんが。

自分のつくった歌を何らかの形で発表してみたいです。バンドかだれかに曲を提供して歌ってもらうか、そのためにはまず何らかの形で発表したいという思いが強くなってきました。いつか形にしたいです。

他には、ボイストレーニングとか英語の発音の習い事ができたらなと思います。また、体が硬くなってきたので、体を柔らかくする体操を自分に合ったやり方でやってみたいです。

浅沼：地域センターこかげ（豊芯会）の「こかげ便り」の作成に参加して、レイアウトを組んだり、文字を入力したり、ネットから画像をもってきたりしたいのですが、コロナでセンターのグループ活動が中止になっていてできません。早く再開してほしいです。

パソコンを使った仕事がしたいです。Word、メール、ネットとできることが増えていて、今度はZOOMを使おうとしており、そのスキルを活かしたいです。

長倉：コロナが収束したら、年休を使って高地トレーニングをやってみたいです。本当はケニアに行きたいけれど現実的ではないので、菅平とか河口湖とかでやってみたいです。

体が動く限りは走っていたいし記録も狙いたいです。体調を維持して、仕事を今まで通りしっかりやって、走りをレベルアップできれば最高です。

（走ることは）記録を出すことも走ることそのものの快感もあり楽しいですし、お母さんが亡くなる前に言った「あんた走れるんだから走りなさい」という言葉がずっと心に残っています。

仕事は今のまま続けたいです。40歳になったら一般就労したいと思っていましたが、職員さんが優しくて今の生活が楽しいので、しばらくこのまま続けたいです。

﨑山：定期清掃が流れるようにできるようになりたいです。ビルクリーニング技能士の試験も受けてみたいです。

お話を聞いて

ストローク会 理事長
村木 太郎

今回は、ストローク会で働いている4人から、働くきっかけや現在の様子、趣味や将来のことまで幅広くお話を聞きました。

4人とも様々な経歴を経てストローク会に勤め始め、そのまま長く勤め続けている方々です。一番長い浅沼さんは、ストローク会の前身の（株）ストローク（1989年創設）の頃から30年間、ストローク会で働いています。4人に「どうしてそんなに長く働き続けられたのですか？」と聞くと、異口同音に「スタッフのみなさんに助けられた」「まわりのみんながやさしかった」と答えてくれました。もちろん、仕事は厳しくて、叱られたりけんかしたり辞めたくなったり、病気や薬のせいで調子に波があったり、長い間にはいろいろな出来事があったわけですが、金子さんを中心とするスタッフに支えられてそれを乗り越えて、今は自信と誇りを持って仕事に取り組んでいるという印象でした。﨑山さんは対人関係で悩んでいたのが、スタッフが開いた「3S講座」を受けて前より物事に動じなくなった、と教えてくれました。また、只隈さんはビルクリーニング技能検定を取ったことが自信に繋がったそうです。他にも「仕事に充実感がある」「もっと仕事を覚えたい」「ビルクリーニング技能検定を受けたい」といった話も出てきました。

各人の趣味の話も印象的でした。長倉さんはランニングが生きがいで、記録更新を目指して一週間に100キロ走っています。他にも音楽、パソコン、ゲーム、食べ歩きなどでさまざまに余暇を楽しんでいます。やりがいのある仕事と充実した余暇が暮らしを豊かにしています。

ストローク会はいろいろな人たちに支えられて事業を続けています。その中心にいるのが働く人たちです。お話を聞いて、障がいのある人も無い人もみんなが充実した生活を送ることができるよう、ストローク会の事業をさらに進めていかなくては、という思いを強くしました。

認可日　1995年8月10日　第三種郵便物許可　（毎週1回水曜日発行）
2022年1月7日発行　増刊通巻第8384号　SSKS ストロークグループニュース

社会福祉法人　結の会

駅弁で旅行気分

2020年度に続き2021年度も残念ながら「秋の旅行」は中止となりました。その代わりに「秋の味覚の旅」と題して、駅弁を注文し、お口の中だけでも旅行気分を味わえる企画を実施しました。みんなで4種類の弁当から選んで注文し堪能しました。

私は明石名物「ひっぱりだこ飯」を頂きました。とても美味しかったです。明石海峡大橋開通を記念し作られた駅弁という事で、昔、子供の頃、家族と淡路島に旅行したことを思い返していました。懐かしいです。（八木）

私は「神戸のすきやきとステーキ弁当」を頂きました。特にすきやきはボリューミーで、食べ応えがあり良かったです。また、ステーキの方は、コンソメのライスで、木ノ子が入っていて、こちらも美味でした。（おっぽ）

エレベーターが止まった!!

8月16日朝、オフィス クローバーが入るビルのエレベーターが停止！7階までの階段昇降を余儀なくされ部材等の搬出搬入もストップ。取り急ぎ同ビル2階に入っているテナントさんにお願いして、利用していない1室を6日間お借りしました。2階は階段移動が困難な利用者の方の作業場としました。10日後の25日にやっと復旧。2階のテナントさんをはじめ、作業をいただいている（公財）新宿区勤労者・仕事支援センターの受注担当者、荷物運びを手伝ってくださった康洋興産の方々、そして7階まで上がりいつも通り作業に励んだ利用者の皆さんのご協力で何とか乗り切ることができました。エレベーターが止まるととっても大変と実感した9日間でした。（友利）

NPO法人 ストローク会

★平成24年度から、“就労継続支援A型事業所”「ストローク・サービス」を開所しました。

その他の事業として精神障がい者の就労・生活に関する支援、ニュースの発行、NPO法人全国精神保健職親会と協力して、就労に関する調査、日曜サロン“つどい”等を実施しています。
★会員数：賛助会員69人、正会員10人、団体3

法人本部／ストローク・サービス
〒161-0031
東京都新宿区西落合2-20-16　POEMビル1F
TEL：03-5996-9533／FAX：03-3954-1130
NPO法人ストローク会　高田馬場事務所
〒169-0075
東京都新宿区高田馬場4-23-13-102
TEL：03-3362-4170／FAX：03-3362-9377

Yui（社福）結の会

★オフィス　クローバー
（就労継続支援B型事業所）

一般企業での就労及び期間付きの就労移行支援の利用では自信が持てない人に、働く場を提供し知識及び能力向上のために必要な訓練を行います。

〒169-0075
東京都新宿区高田馬3-18-25　第一康洋ビル7F
TEL：03-3365-4177／FAX：03-3365-4178
E-mail：yuinokai@axel.ocn.ne.jp
URL：https://yuinokai-clover.com

発行人：障害者団体定期刊行物協会　東京都世田谷区祖師谷3-1-17
編集人：NPO法人ストローク会　〒161-0031　東京都新宿区西落合2-20-16　POEMビル1F
E-mail：info@stroke.jp　URL：https://stroke-kai.jimdo.com/
定　価：100円